

昔がたり (二)

あ ざ み

餘科を終つて専門がきまつた。専門のものは先生の方から

れてしまつた』

命ぜられた、そして一年ばかり前に日本へ來たといふ、西洋の先生につく事となつた。この先生がコーラスでも、キオリンでも、ピアノでも、オルガンでも、和聲でもみんな一人で教へた。どうもはじめのうちは中々話を通じないので、先生が何を云つても黙つてマンジリ／＼してゐた。それで時々日本の先生が通辯に來た。あなた方はよくさう黙つてゐるね、まるで日光のばけ地蔵の様だとよく云はれた。唱歌の時に、どうも日本製の口はRの音やFの音などになれてゐないからドレミではいけないといふので日本舌でもたやすくいはれる音とかへられた。即トケミハソダトと云ふのである。これで色々の音程を唱ふとハハだの、チチだの、ケチダとかソチケなどいふ言葉が出来るのははじめはおかしかつたがぢきにな

其頃やはり女の西洋先生がソロゲザングををしへてゐた。上の級の人のおけいこをわれわれは次の室などでたまげてきいてゐた。ウナボチエボコフハだの、グワルダケビヤンカーナなどといつてうたつてゐた。この先生は冬の日によく淺黄縮緬の日本頭巾をかぶつて來た。それで上の級の人たちは「實みのいらないたんぼほうづき」先生とひどく御丁寧な名をつけてゐた』

今から思ふと随分ハイカラのはしりで、或時は私等も皆洋服を着ることとなつた。洋服をこしらへるといつてもまるで見當がつかないので、洋行をなすつた先生のお世話で洋服屋を學校へよんでおひるの時間に寸法をとらせた。白い看護婦まがひの服に赤い帶などをしめて嬉しがつてゐた』

大日本音楽會といふものがあつて、今日の華族會館。其頃の鹿鳴館といふのに開催された。われ／＼は初舞臺にあの洋服でバラの花などをさして、まじめなかほをしてヘンデルとモツアルトのコーラスをうたつた。モツアルトは Ave verum Corpus といふ洋語でうたつたので。（ラテン語だらうが英語だらうが獨逸語だらうが、日本語でないかぎりは何でも洋語といつてゐた）まへにもいつた様に、ドレミの發音さへむづかしい口どもであるからこれを唱はする先生の骨折は大變な事であつた。その時先生方のオオリンやピアノや何かは、びつくりして目をまろくしてゐる中に天の一方へきえさつた』

何の會だか學校の奏樂堂でひらかれた時、ピアノの初演奏をした。やはり看護婦姿でモツアルトのミニエットをひいたのであるが、例の氣樂散人の事であるからろくにさらひもしないでヨチ／＼とひいた。夢中で茫として何もわからない中にすんで樂屋へひきこむと先生がそばへ來て「すんだらおじぎをして、は入るものだ、そしてあんなにかけ出して、は入つて來るものではない」と叱つた。それでもポケットからきれ

いな銀貨を出してこれは御褒美だといつてくれた。「あらいやだ、そんなものはいりません」といつたら、西洋なら花をやる處だが生憎花がないからといつて無理にたもとへいれてくれた。（それから又先生に氣に入る様にひけた折々もらつた銀貨は今も小箱にしまつてある）』

くわん／＼の先生といふ先生に英語と體操を習つた。このくわん／＼といふわけは上の級の人からをしへてもらつた。別に口のまはりに何もつけてゐるわけではないが、この先生がぢきに何ぞといふと僕が警くわん練習所にゐた時とか、警くわんをしてゐた時とかいふのでこの尊號をたてまつたのださうである。英語はデニングのイングリッシュリーダーで、イトのザットがずい分むづかしかつた。體操は男と女と別々にするので、私等は三人斗でゲラ／＼笑ひながらクニヤ／＼と習つてゐた。』

（今度は大分上の級の方に失禮したが、これはほんとだからしかたがない、今にだん／＼私等のこしらへたのも白状する。）

【入力者注】底本と行を合わせるために、フォントのサイズを変更したり半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…東京音楽學校學友會「音樂」第二卷第七号

明治四十四(1911)年七月十日發行

筆名…あざみ

入力…小林 徹

公開…令和四(2022)年十一月三日

橘系重 [【散文作品集】](#) に戻る。